列島保全への課題

わが国、国土への働きかけの歴史②

弥生時代から古墳時代へ

日本の代表的ため池　満濃池

湿潤地耕作の民

縄文時代の後、紀元前数百年前頃から、大陸から米の文化が伝わり弥生時代を迎えた。当時の技術力では灌漑で土地を潤すことはできず、湿潤な土地しか水田として使えなかったと考えられる。実際、福岡県の板付遺跡や佐賀県唐津の菜畑遺跡に当時の様子が残り、自然の低湿地を利用して水田を開いたことが分かる。この時代の祖先は「湿潤地耕作の民」だった。

6000年前の縄文海進以降、時代が下るにつれ海面は低下し、河川が運んだ土砂が堆積して沖積平野ができ湿地が広がった。湿地からできるだけ排水して使いやすい土地に変え、米を栽培し始めたと考えられ、それほど大きな土木力を必要としなかった。

自然堤防後背地を利用

わが国の最初の水田耕作は、このようにして自然堤防の背後の低湿地から始まり、やがて低湿地の周辺の低い台地などに、水を得る工夫とともに拡大した。河川の上流部や小河川に堰をつくって水を

ため池造成時代の民

その後新たな技術が朝鮮半島などから伝わり、沖積平野に用水をつくって灌漑を用いた水田が開発された。鉄器がもたらされ、集団としての組織力が整備され、小河川の流域の沖積平野に用水灌漑を必要とする水田が開発されたのだ。

当初、堰は水の利用可能量も小さく、取水も不安定で旱魃による被害がたびたび起こり、やがてため池という画期的な技術がもたらされる。こ

大陸伝来灌漑技術で開発

れが湿田から乾田への移行を生んだ。乾田とは、稲を植える前の水を入れない時は乾いて畑のような状態になる田である。年中水に浸っているのではなく、乾燥期もあるため地盤がしっかりして、作業効率が非常によい。自然の低湿地を湿田として利用した時代から、必要なときに必要な水を田畑に導くことで米の生産を行う、きわめて高度な米作生産の時代に入ったのだ。

これは、ため池をつくるという国土への働きかけによって得られた成果だ。ため池をつくるには水が漏れないよう

ため、取水をして水田を開くなどの工夫は、かなり早い時期から行われたようだ。

稲は当初、他の雑穀と混じって灌漑もされずに栽培されていたらしいが、中国江南地方あたりで確立した水田稲作技術を受け入れ、整った水田を形成しながら弥生期末には本州北端にまで広がった。湿潤地耕作時代は、自然の低湿地を水田利用し、効率の悪い湿田耕作しかできなかった時代だが、紀元前100年頃までは、祖先は湿潤地耕作の民だったといわれる。

築堤し、水圧のかかる池の底部から水を引く施設が必要となるなど、技術力が要求される。渡来人の技術力を借り、こうしたため池を建設した。

この時代の日本人は「ため池造成時代の民」と言え、この時代を「第一次の列島改造」と呼ぶ人もいる。古墳時代のこの頃に、河内平野では多くのため池がつくられた。その記録は『日本書紀』などにも描かれ、崇神・垂仁・応神・仁徳などの各天皇の時代に多くのため池をつくらせ、それによって地域の人が安心して暮らせるようになったという記述が多く残る。

讃岐の満濃池は821年（弘仁12年）、空海が修築したことで有名だが、700年代初めに築造されたものを空海が改修したのだ。満濃とは「多くの地域に富を及ぼす」意味といわれ、皆の力を合わせて、皆のためになるものをつくる「公共の事業」の始まりとして象徴的な名称だ。

この技術力により仁徳天皇陵や応神天皇陵という大土木工事を必要とする大規模な墳墓の築造が可能となった。巨大な天皇陵建設には、測量や工程管理、盛土の締固めなどの高い技術力をすでに獲得していたに違いない。それほどの土木力をこの時代の人間が持っていたわけで、その技術力を用いて農業生産性は飛躍的に増大した。大土木事業は労働の大動員なしには行えない。大動員できる大きな

公共事業の始まり　空海が改修した満濃池

弥生時代の水田跡が復元された菜畑遺跡

権力が既に生まれ、古墳時代の政権を支える力になっていたのだ。

畿内や瀬戸内から始まったため池づくりは全国に展開していった。今もこれらのため池は農業や生活のための水資源として機能している。ため池づくりは、過去に日本人が行った歴史的な事実としてのみあるのではなく、今に生きる我々も、生産や生活のための装置として利用している。貧しかったはるか昔の人々からの贈り物なのである。

ため池に水を貯め、その水を用いて田んぼを耕作する時代には、水不足が何より心配だった。本間俊朗氏によれば、『日本書紀』『続日本紀』の、645年から791年の147年間の記述の中で、人々が「雨が降って欲しい」と祈ったという例が70例記載されているのに対し、「洪水になるから、もうこれ以上雨が降らないで欲しい」と、雨が止むことを祈った例はわずか4例だという。

この頃の日本人は大雨による洪水を恐れるより、旱魃で雨が降らず、田んぼに水が引けないことを恐れる民だったという。旱魃を恐れる時代の存在は、洪水の通り道を農地や都市のために利用しているがゆえに洪水を恐れることとなった後の時代との対比として、知っておきたい。

国土と日本人
災害大国の生き方
大石久和著

本著では日本の国土の地形的・社会的特徴や国土への働きかけの歴史が明らかにされています。日本人は今、何を考えるべきか、に気づくことの出来る好著。
発行：中央公論新社
定価：882円（本体840円）